

中世盛期北フランスの諸侯家系による権力の表象

——一〇七〇年フランドルの奉獻式を中心に——

上 山 益 己

はじめに

本論では儀礼という側面から中世盛期北フランスの諸侯権力を考察する。儀礼と権力との関係は、政治文化研究という観点の導入にともなって、一九八〇～九〇年代頃から歴史学で盛んに取り上げられるテーマの一つとなった^①。中世フランス史では王権について多くの研究がなされている^②。しかし中世盛期の諸侯家系について取り上げたものは、一二世紀後半からプランタジュネ領内で散見されるようになる即位儀礼などを考察したH・ホフマンの研究がある程度にすぎない^③。中世盛期フランスの諸侯家系が行使した影響力を考えると、その重要性に比して研究は進んでいないといえよう。こうした研究状況にあつて、本論ではフランドル伯家を取り上げる。これは、九世紀末からフランス王国の北東端に勢力を伸ばし始め、一〇世紀中頃には自立的な勢力圏を確立した諸侯家系である。近隣の諸侯や皇帝ともたびたび矛を交え、帝国側にも勢力を拡大した。一一世紀中頃には幼いフランス王の後見役を務めるなど、きわめて活発な政治的・軍事的活動を行っている^④。

このフランドル伯家は、平和令集会や教会施設の奉獻式などにおいて、しばしば「聖遺物を集めた」ことが知られている。エディナ・ボゾキー (E. Bozoky) が九～一一世紀の同伯家の教会政策を扱った論文でこれを取り上げ

ているが、しかしいたって概略的なものとどまっている。ボゾキーの研究がそうしたものとどまったのは、残存する史料の多くに具体的な情報が欠けていることに起因している。こうしたなか、例外的に同時代の史料が多く残されているのが、一〇七〇年のアスノン修道院の奉獻式の事例である。⁽⁷⁾ アスノンは、現在のフランスの地域区分でいうとノール県内にある。中世盛期当時、フランス王国内のフランドル伯領としては南端に位置し、ここより数km南方のヴァランシエンヌは、もう神聖ローマ帝国側のエノー伯領であった。この地に七世紀後半に建てられたのがアスノン修道院であるが、おそらくはヴァイキングの侵入に伴って一一世紀当時にはすっかり荒廃していた。⁽⁸⁾ これを再建したのが、フランドル伯ボードワン・ド・モンス(位一〇六七〜七〇)である。彼は一〇七〇年に再建された同修道院の奉獻式を行い、この際に「全支配圏(totus principatus)のすべての聖遺物(cunctorum corpora sanctorum)を集合させるよう命じた」。⁽⁹⁾ 本論では、このアスノンの「聖遺物集合」の事例を主たる考察対象とする。またこれとの比較対象として、一〇三〇年にアウデナールデ、および一〇六五年にリールで行われた「聖遺物集合」の事例も取り上げる。これら二つの事例は同時代の詳細な史料を欠いており、かなり後代の史料に依拠することになるため慎重に扱う必要があるが、アスノンの事例との比較対象としては利用可能であろう。これらを比較分析することによって、中世盛期フランスで王権とならんで領域的な支配を担っていた、諸侯家系による権力の表象のあり方を考察したい。

アウデナールデとリールの「聖遺物集合」

アスノン修道院の事例を論じるのに先立ち、まずは時代順に一〇三〇年のアウデナールデの「聖遺物集合」を見てみよう。これは、ボードワン・ド・モンスの祖父にあたるボードワン・ル・バルビュ(位九八七〜一〇三五)の主導の下、ノワイヨン司教と協力して開かれた「平和令集会」の際に行われたものである。⁽¹⁰⁾ 平和令集会であるから

には、アスノンの奉献式とは本来的には異なる催事ではあるが、しかしこれはフランドル伯の主導で行われており、伯のイニシアティブのもとで領内の聖遺物が集められたという点では比較対象たり得るだろう。さて比較的近い時代に書かれたアフリヘム版『シジュベールの年代記』は、この集会において「バルビュと呼ばれる伯ボードワンが、自らの伯領 (marchisia) の聖人たち——バウォ、ワンドレギシルス、アマンドウス、ウエダストウス、ベルティヌス、ウインノクス——の遺物を、他の数え切れない聖遺物とともに集めた」と記録している⁽¹¹⁾。多くの聖遺物が集められたと考えられるが、名を挙げられた六人の聖人以外には「数え切れない聖遺物」と記すだけで、具体的情報⁽¹²⁾が乏しい。しかし、この不足している情報を補うものが存在している。それは一六世紀の歴史家ヤコブス・メイエルスによつて書かれた『フランドルの諸事についての記録あるいは年代記一七書』である。ヤコブス・メイエルスは、ブルツへのシントッドナース教会などで司祭を勤めた人物だが、人文主義者としても知られている。複数の歴史書を書き残しているが、その作成にあたつては、刊行された史料に依拠するだけでなく、諸教会に保管されていた多くの未刊行の手写本を調査したとされ、その評価は高い⁽¹³⁾。彼の記述によつて補うなら、アウデナールデには少なくとも一五体の聖遺物が集められていたことになる⁽¹⁴⁾。(表参照)。

次に、一〇六五年にボードワン・ド・モンスの父ボードワン・ド・リール(位一〇三五—一〇六七)によつて行われたリールのサンピエール教会の奉献式での「聖遺物集合」を確認しておこう。この奉献式については、これを記録したサンピエール教会の証書が現存しており、式そのものがあつたことははっきりと確認できる。その奉献式については、時代を下つて一二世紀に書かれた叙述史料『フランドリア・ゲネローサ』が「…この(フランドル伯)ボードワン(・ド・リール)は、リールに城と使徒聖ペテロの教会を建て、…前述の教会の奉献式のために、自身の伯領全土 (totus comitatus) からすべての聖人 (omnes sancti) を運んでくるよう願つて指示した…」と記しており、この奉献式でも大規模な「聖遺物集合」が行われた。参事会教会と修道院という違いはあるものの、

表 アスノン（1070年）、アウデナールデ（1030年）、リール（1065年）での奉獻式に集められた聖人たち

		集められたか否か		
集められた聖人名	本来の所蔵場所	アウデナールデ	リール	アスノン
聖アマンドゥス	サンタマン＝レゾー	○	×	○
聖アウドマルス	サントメール	×	○	○
聖パウオ	ヘント	○	○	○
聖ベルティヌス	サントメール	○	○	○
聖ドナティアヌス	ブルッヘ	○	○	○
聖ウィンノクス	ベルグ・サン＝ヴィノック	○	○	○
聖ウェダストゥス	アラス	○	○	○
聖ワンドレギシルス	ヘント	○	×	○
聖アメルベルガ	ヘント	○	×	×
聖アンスベルトゥス	ヘント	○	×	×
聖ゲルルフス	ヘント（ドロンゲン）	○	×	×
聖ファライルディス	ヘント	○	×	×
聖ランドアルドゥス	ヘント	○	×	×
聖ウィンキアナ	ヘント	○	×	×
聖ウルフランヌス	ヘント	○	×	×
聖ワルブルギス	フールネ	○	×	×
聖アマトゥス	ドゥエ	×	○	○
聖エウエラルドゥス	シソワン	×	○	○
聖エウベルトゥス	スクラン	×	○	○
聖エウゼビア	マルシェンヌ	×	○	○
聖マウロントゥス	ドゥエ	×	○	×
聖ピアトゥス	スクラン	×	○	○
聖リクトゥルディス	マルシェンヌ	×	○	○
聖アルデグンディス	モブージュ	×	×	○
聖アイカドルス	アスブル	×	×	○
聖ギスレヌス	サン＝ギスラン	×	×	○
聖フゴ	アスブル	×	×	○
聖インノケンティウス	コンデ・シュル・レスコー	×	×	○
聖ランデリヌス	クレспан	×	×	○
聖マルセルス	オーモン	×	×	○
聖ラゲンフレディス	ドゥナン	×	×	○
聖レギナ	ドゥナン	×	×	○
聖サルウィウス	ヴァランシエンヌ	×	×	○
聖ウィンケンティウス	ソワニエ	×	×	○
聖ワルデトゥルディス	モンズ	×	×	○

一〇七〇年にアスノンの奉献式を行ったボードワン・ド・モンズからすれば、実父が行ったまさに直前の先例といえるだろう。『フランドリア・ゲネローサ』も、この時集められた聖遺物の具体的な情報を伝えてはいないが、一六―一七世紀に生きたイエズス会士ジャン・ビュズランの著書『俗にして聖なるガロ＝フランドリア』が不足した情報を補ってくれる。⁽¹⁸⁾ ビュズランはまったく無名の歴史家といいいいが、一八世紀に書かれた歴史家批評書では、「先行する史料を信じて寓話的なものそのまま記載してしまう」点を批判されているが、原史料には忠実であると評価されている。ビュズランは、この「聖遺物集合」について簡潔な文体で詳細な情報を記しており、⁽²⁰⁾ 現存していない何らかの史料に基づいて記した可能性は高い。このビュズランの記述に依拠するなら、リールには少なくとも一三体の聖遺物が集められた⁽²¹⁾（表参照）。

さて、この二つのケースを相互に比較すると、両者に共通して登場している聖パウロ、聖ペルティヌスなどの五体の聖遺物が目を引く。これらは、それぞれの地への献納にフランドル伯家が関わっており、また、それぞれが置かれている教会施設や都市も、伯家の本拠地的な役割を果たしている地であるなど、その関係性がもともととくに深い聖人たちである。⁽²²⁾ アスノンの事例との比較は後で行うが、アウデナールデとアスノンの双方に「出席」した聖アモンドゥスと聖ワンドレギルス、リールとアスノンの双方に出席した聖アウドマルスも伯家との結びつきが強く、⁽²³⁾ 先の五体に準じるものとみなせる。しかし、伯家主導で行われた集会や式典に、こうしたとくに関係性の強い聖遺物が集められたのはむしろ当然と言えるので、注目すべきはそれ以外となる。アウデナールデでは、聖アメルベルガなどの八体がそれに当たるが、聖ワルブルギスを除いて、これらはすべてヘントから移送されたものである。⁽²⁴⁾ 聖パウロなども含めると、実に一五体中九体がヘントから運ばれたことになる。ヘントからこれほど多くの聖遺物が運ばれたのは、これが伯家の本拠地ともいえる都市の一つであり、なおかつ相対的にアウデナールデに近かったからであろう。すなわち、「数え切れない聖遺物」を集めたというものの、「集合場所」に相対的に近い伯家

の本拠地的な都市から多数の聖遺物が持ち込まれたことになる。これに対し、より後年に行われたリールの聖遺物集合では、ヘントから集められた多数の聖遺物は姿を消し、代わりに聖アマトウスなどの七体が集められた。これら七体はドウエなど複数の場所から移送されている。そこにはかなり小規模な町も含まれており、ヘントのように伯家の本拠地的な都市ではない。しかもそれらはリールの近くに、同市を取り囲むように位置している。すなわち、伯家の本拠地的な都市から多数の聖遺物を持ち込んだアウデナールデの事例とは異なり、リールの周辺から、いわば「地元」の聖遺物が七体も集められたと評価できよう。より在地的な聖遺物が集められたといえる。

この差異は、伯家の権威・勢力の浸透という側面から理解できる。フランドル伯家は、一〇世紀後半に一度弱体化しており、伯家の支配圏は本来の地盤である北海沿岸地域に収縮していた。一一世紀に入ると、精力的なボードワン・ル・バルビュがふたたび家勢を盛り返して北海沿岸地域から南方の内陸部へと支配圏を拡大していくが、一〇三〇年のアウデナールデの平和令集会は、まだその過渡期といえる。いっぽう一〇六五年のリールの奉献式は伯家が充分に力を取り戻してからのことであり、実際に権勢の及ぶ範囲が広まったことによって、より在地の聖遺物にも動員をかけられるようになったと考えられる。さらにリールという地が、フランドル伯の所領からすると南方に位置しむしろ周辺にあたることを考えると、在地の聖遺物に動員をかけ、それらを実際に動かすことで自家の支配の浸透を印象付けようとしたのであろう。同じように多くの聖遺物を集合させるとしても、それらがもとと置かれていた場所がより細かく配慮され、在地の聖遺物が意図的に選択されるようになっていことがこの二つの事例から理解できる。

アスノンの「聖遺物集合」

では、これらを踏まえた上で、アスノンの事例を考察するとどうなるだろうか。まず奉献式全体の様子を概観し

ておこう。この奉献式にはブルツへのシントッドナース教会の聖職者たちも参加しているが、同教会の聖堂参事会員が著した『ブルツへの聖ドナティアヌスの奇蹟について』は、この時の式典を「祝祭の誉れの極致」と表現し、「この修道院を神に奉献するために、この地の第二のソロモンと呼ばれるべきボードワンは、その限りなき豊かさから、驚くほどのしつらえを…準備することにした」と記している。⁽²⁶⁾伯家の威信をかけたきわめて大規模な式典であつたことが推察できる。この式には多くの聖職者や俗人有力者たちが参加しているが、それだけではなかつた。アスノン修道院の公式の歴史書『アスノン修道院史』によれば、この奉献式はボードワン・ド・モンズによつて「民衆のために」「二重の祝祭 (festum duplicatum)」となるよう、聖人の祝祭日と連続した日程になるよう配慮されていたという。⁽²⁸⁾そして実際に、シントッドナースの聖堂参事会員によると、「…そこには、あまりにも多くの何千という民衆が群がり集まつており、…彼らは(町の)外側で町の近くにテントを張り、…いたるところで群れをなして(奉献式のために集められた)聖人たちの遺物のところへ駆けつけ…聖人たちのとりなしによつて神が自分たちを赦してくれるよう願つていた…」という状態で、同教会の一向が自分たちの居場所を確保するのに苦労したほどであつた。この奉献式が単に大規模なだけではなく、民衆に開かれた公開性の高いものであり、実際に多くの人びとが訪れていたことが分かる。

『アスノン修道院史』などには、集められた聖遺物の詳細は記録されていないが、アスノン修道院において書写された『シジュベール・ド・ジャンブルーの年代記』の該当する年代に、以下のような加筆が行われている。

「…この地は、六月三日に…奉献された。…これは、三人の司教によつて行われた。すなわち、カンブレ司教リエトベルトウス、ノワイヨン司教ラボドウス、オルレアン司教ライネルスによつて。…主の受肉から一〇七〇年に。…出席した聖人たち…オーモンの教皇聖マルセルス、テルアンヌの聖アウドマルス、スクランの殉

教者聖ピアトウス、セルの修道士聖ジスレヌス、ヴァランシエンヌの殉教者聖サルウィウス、ソワニエの聖ウインケンティウス、コンデの聖インノケンティウス、〔サントメールの〕修道院長聖ベルティヌス、ドウエの聖アマトウス、修道院長聖ウインノクス、ブルッへの聖ドナティアヌス、〔ブランダン〕の修道院長聖ワンドレギシルス、アラスの聖ウエダストウス、〔ヘントの〕聖バウオ、〔シソワンの〕聖エウエルドウス、レゾーの聖アマンドウス、リールの聖エウベルトウス、〔クレスパンの〕聖ランデリヌス、〔アスブルの〕聖ユーグ、〔アスブルの〕聖アイカドルス、〔マルシエンヌの〕聖リクトウルデイス、〔マルシエンヌの〕聖エウゼビア、〔モブージュの〕聖アルデグンデイス、〔ドゥナンの〕聖ラゲンフレデイス、〔ドゥナンの〕聖レギナ、〔モンスの〕聖ワルデトウルデイス³⁰」。

これによると、じつに二六体もの聖遺物がアスノンへ一堂に集められた（表参照）。ではこのアスノンの「聖遺物集合」と、先述した二例とを比較するとどのようなことが明らかになるだろうか。まずすぐに気が付く大きな違いは、集められた聖遺物の数の増大である。もちろん、それぞれの史料に、集められた聖遺物がすべて記載されていない可能性があるが、しかしそれでも、アウデナールデ（一五体）とリール（一三体）の事例が比較的近い数となっているのに対して、アスノンのそれはじつにリールの二倍である。前二者に比べてかなり大規模であった蓋然性は高い。シントッドナースの聖堂参事会員が「祝祭の誉れの極致」と呼び、「居場所が見付からないほど民衆が押し寄せていた」と記していることも符合する。

アスノンでもやはり伯家とくに関係性の強い聖遺物が集められているが、これらの総数はもちろん大きく変わらない。いっぽう、近隣からリールへと移送された聖アマトウス以下の聖遺物のほとんどが、アスノンでもやはり集められている。これは、ドウエやマルシエンヌ、シソワン、スクランといった地が比較的アスノンとも近いため

に、引き続き地元の聖遺物として集められたのだろう。表を見ればすぐに明らかになることだが、アスノンの奉獻式における聖遺物の総数の大幅な増加につながったのは、これまで見られなかったひじょうに多くの聖遺物が集められたからである。すなわち、聖アルデグンデイス以下の12体であるが、まさにこれらによって、集められた聖遺物の総数が倍増していることが分かる。しかもこれらがもともと安置されている地は、これまでに比べてかなり南方に位置している。先述したようにもともとフランドル伯家は低地地方の中でも北海側が地盤であり、そこから南へと勢力を伸ばしてきた経緯がある。アスノンに集められた聖遺物のリストは、より南方へと、聖遺物を動員する地が広がっていることを示しているが、これは伯家の勢力の拡大と合致しているといえる。

しかしそれにしても、なぜこれほどまでに増えたのであろうか。ここでもこれらの聖遺物がもともと置かれていた場所が重要となる。すなわちこれらの一二体は、本来のフランドル伯領ではなく、南隣するエノー伯領から運ばれてきたと考えられるのである。⁽³¹⁾ ボードワン・ド・モンスは、その通称に含まれる「モンス (Mons)」という地名が示すように、エノー伯も兼ねていた。両伯家はほんらい別の家系であり、一一世紀前半には激しく抗争さえしている。⁽³²⁾ 両家が結び付くのは、エノー伯エルマン（一〇五〇頃没）の死後であった。寡婦となったエノー伯夫人リシルドは、ボードワン・ド・モンスと再婚したのだ。⁽³³⁾ そして一〇六七年の父の死をもって、ボードワン・ド・モンスはフランドルとエノー双方の伯となったのである。すなわち、ボードワン・ド・モンスは、このアスノンの奉獻式において、父祖伝来のフランドルのみならず、自身が新たに獲得したエノー伯領各地の聖遺物をも一堂に集結させたのである。この奉獻式の実現は、伯家の支配の浸透を鮮明に印象付けるとともに、ボードワン・ド・モンスがフランドルとエノーの正統な支配者であるとの強力なメッセージとなっただろう。

さらにこのアスノンという地が持つ意味も見落としてはならない。アスノンはフランドル南方の境界域にあり、間近にエノー伯領を臨むところに位置している。両伯領がつねに境を接している地であり、従来はむしろ角逐の場

であつた。この地にフランドルとエノーの聖遺物を平和の内に一堂に集めるということは、両伯領の和合を象徴することになる。この奉獻式が行われた時のアスノンは、それぞれからほぼ半数ずつ集められた多数の聖遺物によつて、旧来の支配圏と新たな支配圏とが対等に接合される場になつていたのである。このように考える時、この奉獻式が多くの人に公開された祝祭であつたこともさらに重要な意味を持つてこよう。式の参加者は、遠く離れた各地から召集された聖遺物の行列を巡覧し、居並ぶそれらに参詣することで、フランドル伯の権勢とその支配圏を視覚的に再認識することになつたと考えられる。フランドル側に属する者の中には、この壮麗なスペクタクルを通じて、エノーにまで及ぶ伯の權威を初めて具体的に認識する者も多かつたことだろう。逆にエノー側に属する者に対しては、北海にまで至るその權威を知らしめることになつたにちがいない。民衆たちは数多く集めてくる聖遺物移送の行列を目にして、漠然と東西南北に広がる広大な所領をイメージしたかもしれない。おそらくこうした強烈なイメージを印象付けることこそが、伯権力がこの巨大な祝祭を主催した意図であつたと考えられる。すなわち伯家は、アスノンの奉獻式に、古くからの支配圏と新しい支配圏の聖遺物を集めることで、自らの支配が及ぶ範圍を明瞭にして、壮大なスペクタクルの内にそれを顕示してみせたのである。

おわりに

本論では一事例を提示したのみに留まるが、中世盛期の社会において、このような衒示的営為を通じた自己の權威の表象は、諸侯権力によつて様ざまに行われていたにちがいない。というのも、まとまつた史料の欠如のために詳細をうかがえる事例は少ないものの、そうした衒示的な営為が行われていたことを示唆する行動や断片的な形跡はしばしば見られるのである。たとえば諸侯権力が多くの聖遺物を手に入れ、それらを自家の領内各所の教会に献納している事例は多い。⁽³⁵⁾ おそらくそれらの献納においては、壮麗な聖遺物移送の行進などが挙行されていた可能性

は高いだろう。また新しく得た所領に教会や修道院を建設し、それらを自らの墓所としている事例も多い⁽³⁶⁾。それらの教会や修道院については、その建立の本来の目的として、新しい所領において自らの權威を——死後も——知らしめるべく、支配者のものにふさわしい莊嚴な墓所として建設された可能性が考えられる。さらにそうした墓所では、諸侯らの武勇や支配者としての徳、敬虔さを称揚するエピソードも刻まれた⁽³⁷⁾。これもまた衛示的営為の一つといえるだろう。そもそもこうした儀礼の挙行や教会施設の建設、さらに城の建設などは財力の誇示ともなったはずである。またアキテーヌ公やプランタジユネ家などの宮廷では華やかな俗語韻文の文化が他に先駆けて花開いており、彼らの宮廷は世俗文化の中心ともなっていた。そうした文化的パトロネジもまた、彼らの権力に華やかな審美性を与える演出となつただろう⁽³⁸⁾。史料の乏しさという制約を乗り越えて諸侯家系による権力の表象の実態を明らかにしていくためには、本論で扱ったアスノン修道院の奉獻式のような検証可能な事例の研究を少しでも多く積み重ねていくしかないだろう。今後の課題としたい。

註

- (1) こうした研究の手法はもともと、V・W・ターナーやクリフォード・ギアツなど人類学者らによって取り組まれてきたものである。V. W. Turner, *The ritual process: structure and anti-structure*, London, 1969 (V・W・ターナー『儀礼の過程』富倉光雄訳、思索社、一九七六年); C. Geertz, *Negara: the Theatre State in Nineteenth-century Bali*, Princeton, 1980 (C・ギアツ『ヌガラ——一九世紀バリの劇場国家』小泉潤二訳、みすず書房、一九九〇年) など。こうした研究手法が、社会史研究の進展に伴って、一九八〇～九〇年代頃から歴
- (2) 史学に取り入れられるようになった。
渡辺節夫氏が、フランス王権の儀礼や聖性を巡る諸問題・研究動向をまとめている。渡辺節夫「ヨーロッパにおける国王祭祀と聖性」『王権のコスモロジー(比較歴史学体系1)』水林彪・金子修一・渡辺節夫編、一九九八年、二五九～二八一頁。同「王の誕生と死 フランス中世」『コスモロジーと身体(岩波講座 天皇と王権を考える 第八卷)』山本幸司他著、岩波書店、二〇〇二年、二四九～二七六頁。同『フランス中世政治権力構造の研究』東京大学出版会、一九九二年。
- (3) H. Hoffmann, 'Französische Fürstenweihen des

- Hochmittelalters', *Deutsches Archiv für Erforschung des Mittelalters*, 18, 1962, pp.92-119. なお近年では⁵⁶中世後期の諸侯権力については⁵⁷たとえばブルゴーニュ公の入市式などが研究されているが、当然のことながら時代や置かれている社会状況が大きく異なるため、中世盛期の諸侯権力と同列に扱うことはできない。中世後期の研究については⁵⁸E. Lecuppre-Desjardín, *La ville des cérémonies: Essai sur la communication politique dans les anciens Pays-Bas bourguignons*, Turnhout, 2004; J. Hurbut, 'Symbols for Authority: Inaugural Ceremonies for Charles the Bold', in *Staging the Court of Burgundy*, ed. W. Blockmans et al., London/Turnhout, 2013, pp.105-112; 河原温「ブルゴーニュ公シャルル・デ・メーレルの一四七四年ディジョン入市式について」『人文学報』四九〇号、二〇一四年、一〇一四頁など。
- (4) ノルマン・コンクエストや第一回十字軍など、中世盛期フランスの諸侯は、しばしばフランス王国の枠を超えて政治的・軍事的イニシアティヴを発揮していた。
- (5) フランドル伯家の概要については⁵⁹David M. Nicholais, *Medieval Flanders*, London/New York, 1992。
- (6) E. Bozoky, 'La politique des reliques des premiers comtes de Flandre', dans *Les reliques : objets, cultes, symboles: Actes du colloque international de l'Université du Littoral-Côte d'Opale (Boulogne-sur-Mer)*, 4-6 septembre 1997, éd. E. Bozoky et A.-M. Helvétius, Turnhout, 1999, pp.271-292.
- (7) 関連する史料は⁶⁰Tomellus, *Tomelli Historia Monasterii Hasnoniensis*, MGH, SS, tom. 14, pp.147-158; Tomellus monachus Hasnoniensis, *Historia Hasnoniensis Monasterii*, PL, tom. 147, cols.585-600; *Ex Miraculis S. Donatiani Bruggensis*, MGH, SS, tom. 15, pars II, pp.854-858; AASS, oct., tom.6, 1853, pp. 504-6; *Auctarium Hasnoniense*, MGH, SS, tom.6, pp. 441-2 など。なおこの事例はギンキーも触れているが、あくまで全体の流れの中の一事例でしかなく、本論で扱っている史料の多くも取り上げられてはいない。集められた聖遺物の意味や、地理的な配置の重要性、伯家の意図などについてもよく考察されている。
- (8) 史料の欠如のために詳細な経緯は不明だが、⁶¹「カンブレ司教の事績」によれば「今や…荒らわれ、みすぼらしくなったそれを見るのは我われには辛い」という状態になっていた。⁶²*Gesta episcoporum Cameracensium*, lib. II, MGH, SS, tom. 7, p.460.
- (9) *Ex Miraculis S. Donatiani Bruggensis*, p.857.
- (10) アウデナールデの平和令集会は、当然のことながら「神の平和」関係の研究としては取り上げられる。たとえば⁶³B. Töpfer, 'Die Anfänge der Treuga Dei', *Nordfrankreich, Zeitschrift für Geschichtswissenschaft*, 9, 1961, pp.876-893; H. Platelle, 'La violence et ses remèdes en Flandre au XIe siècle', *Sacris Erudiri*, 15, 1971, pp.101-173 など。

- (11) *Auctarium Affigemense*, MGH, SS, tom.6, pp.398-405 (引用箇所は、p.399). なお、現存する写本は一四世紀半ばに書かれた『エルマール年代記』にもほぼ同じ内容の記述があるが、ここでは聖ゲルルフスを加えた七人の聖人の名前が挙がっている。 *Annales Elmenses*, dans *Les annales de Saint-Pierre de Gand et de Saint Amand*, pub. par Ph. Grierson, Bruxelles, 1937, pp. 89-90.
- (12) Jacobus Meyerus et Antonius Meyerus, *Commentarii sive annales rerum Flandricarum libri septendecim*, Antwerpen, 1561.
- (13) メイエルス *ニゴスベチ* A. Bonvarlet, 'Jacques de Meyere, de Flêtre : notice sur sa vie et ses travaux', *Annales du Comité Flmand de France*, 22, 1895, p. 1-81; 青谷秀紀『記憶の中のベルギー中世：歴史叙述にみる領邦アイデンティティの生成』京都大学学術出版会、二〇一一年、二二一～二二三頁など。
- (14) J. Meyerus et A. Meyerus, *op. cit.*, fol.23.
- (15) リールの奉獻式が開催された年についてメイエルスは一〇六六年としているが、証書と『フランドリヤ・ゲネローサ』は一〇六五年としており、*ノットベネザン*を取る。 *Cartulaire de l'église de collégiale de Saint-Pierre de Lille*, pub. par E. Hautcoeur, tom.1, Lille/Paris, 1894, p.1; *Fryndria Generosa*, MGH, SS, tom.9, p.319; J. Meyerus et A. Meyerus, *op. cit.*, fol.26-26v.
- (16) *Cartulaire de l'église de collégiale de Saint-Pierre de Lille*, p.1.
- (17) *Fryndria Generosa*, p.319.
- (18) Jean Buzelin, *Gallo-Flandria sacra et profana, in qua urbes, oppida, regimeneclae, municipia, et pagi praecipui Gallo-Flandrici tractus describuntur ; horumque omnium locorum antiquitates, religio, mores, sacra aedificia, piee fundationes, principes, gubernatores, et magistratus proponuntur dein annales Gallo-Flandriae*, lib.II, Douai, 1625.
- (19) *Mémoires pour servir à l'histoire littéraire des dix-sept provinces des Pays-Bas, de la principauté de Liège, et de quelques contrées voisines*, pub. par l'Imprimerie Academique, tom.2, Louvain, 1763, pp.418-420.
- (20) 奉獻を行つた司教の名など。
- (21) Buzelin, *op. cit.*, p.269.
- (22) 聖バウウォ、聖ウインノクス、聖ミナティアヌスの聖遺物は、歴代の伯が取得して各地に献納し、それぞれを奉じる教会や修道院を建立・再建している。 *Annales Gandenses*, MGH, SS, tom.2, p.188; *Ex Vita Winnoci*, MGH, SS, tom.15-2, pp.776-777; *Flandria Generosa*, p. 318; Ch. Mériaux, *Gallica irradiata : Saints et sanctuaires dans le nord de la Gaule du haut Moyen Âge*, Stuttgart, 2006, p.259. 聖ベルティヌスの聖遺物が置かれたサントメールのサンニールタン修道院はかつてフランドル伯が俗人修道院長を務めていた。 *Collection des cartulaires de France 3: Cartulaire de l'abbaye de*

Saint-Bertin, tom.3, pub. par M. Guérard, Paris, 1840; *Gesta abbatum S. Bertini Sithiensium*, MGH, SS, tom. 13, pp.600-673. 聖ウエダストゥスの聖遺物が置かれたアラスのサン・ヴァ修道院は、九三二年にアルヌール・ブランが掌握している。 *Annales S. Martini Tornacensis*, MGH, SS, tom.15-2, p.1296; *Les annales de Saint-Pierre de Gand et de Saint-Amand*, p.17. 十一世紀初頭のサン・ヴァ修道院長リシャル・ド・サン・ヴァアンヌとフランドル伯家は修道院改革について密接な協力関係を結んでいた。 *Nicholas, op.cit.*, p.48. またサン・メーメルとヘントにはそれぞれ伯家の墓所がある。青谷秀紀「前掲書」七〇～七五頁。

- (23) 聖アウグマルスと聖フランドレギシルスの聖遺物の取得・献納にもやはり歴代の伯が関わっている。 *AASS, feb.*, tom.2, pp.347-8; *Les annales de Saint-Pierre de Gand et de Saint-Amand*, p.19; *Acta sanctorum Belgii selecta*, tom.5, éd. J. Ghesquière et C. Smet, Bruxelles, 1789, pp.478-490. また聖ヘンリッハスの聖遺物が安置されていたサンタマン・レーン修道院長マルボドゥスとフランドル伯家は修道院改革を巡って十一世紀には協力関係にあった。 *S.Vanderputten, Monastic Reform as Process: Realities and Representations in Medieval Flanders 900-1100*, Ithaca, 2013, p.163. 十一世紀中葉には、ボードワン・ド・リールの協力により、聖アマンデゥスの聖遺物がフランス王国内を巡回している。 *Acta sanctorum Belgii selecta*, tom.4, 1787, pp.273-275; *PL*,

tom.150, cols. 1435-1440.

- (24) 聖アメルヌルガ、聖アンズベルトゥス、聖ウルランヌスの聖遺物はそれぞれヘントのシント・ピーテル修道院に安置されている。 *P. E. Szarmach, Writing Women Saints in Anglo-Saxon England*, Toronto, 2013, p.284; *AASS, jul.*, tom.3, pp.70-74; *AASS, feb.*, tom.2, pp. 347-348. 聖フアイルデイス、聖ヘンリッハス、聖ウィンキアナの聖遺物は、それぞれヘントのシント・バーフ修道院に安置されている。 *Annales Gandenses, MGH, SS*, tom.2, p.188; *Sanci Landoalti et sociorum translatio, adventus, elevatio*, MGH, SS, tom.15-2, pp. 599-611; *Acta sanctorum Belgii selecta*, tom.3, 1785, p. 346. 聖ガルプスの聖遺物は、九一五年にヘント近郊・ロンケンに安置された。 *Ex Adventu S. Gervaji, MGH, SS*, tom.15-2, p.907.
- (25) アルヌール・ル・シューム (位九六四—九八七) が、幼少で伯位を継いだため。
- (26) *Ex Miraculis S. Donatiani Bruggensis*, p.857.
- (27) *Tomelli Historia*, p.157; *Ex Miraculis S. Donatiani Bruggensis*, p.857.
- (28) *Tomelli Historia*, p.157.
- (29) *Ex Miraculis S. Donatiani Bruggensis*, p.857.
- (30) *Ancarium Hasnoniense*, pp.441-2. なお、亀甲括弧内の地名は、『年代記』への加筆が『アスノン修道院史』に書写された際に補われたものである。
- (31) 一二体が普段置かれている地のうち、モブージュ、サ

ン・ギスラン、ソワニエ、モンヌ、オーモンは、エスコ
ー河の右岸側で、河自体からかなり南方にあり、エノ
ー伯領に属しているのは間違いない。コンデ・シュル・
レスコーとクレスパンもエスコー右岸だが、これらは河
に近接しているので、フランドル伯領との境界に近い。
しかし一〇六五年のエノー伯の証書で、ジューマップから
コンデ・シュル・レスコーに至るエヌ河の漁業権がサ
ン・ギスラン修道院に与えられており、この領域に含ま
れるクレスパンも含めて、この時期にこれらの地はエノ
ー側に属していたと考えられる。Ch. Davivier, 'Quelles
étaient l'importance et les limites du Pagus Hainoen-
sis jusqu'au XI^e siècle', dans *Mémoires et publications
de la société des sciences, des arts et des lettres du
Hainaut, années 1863 et 1864*, Mons, 1864, p.411. ヴァ
ランシエンヌは一〇一五年にはフランドル伯家の支配下
に置かれたが、一〇四七年にエノー伯に譲渡されている。
D. Nicholas, *op. cit.*, p.46; J. Dhondt, *Les origines de la
Flandre et de l'Artois*, Arras, 1944, p.73. 一世紀のド
ウナンの帰属については、同時代の史料がほとんど残さ
れていないため、不明な点が多い。しかし、同時代の実
物は現存していないものの、一四世紀初に書かれた文書
の中に、一〇六九年に皇帝ハインリヒ四世がドウナンの
帰属に関して発給した証書が書写されており、これに基
づくなら、アスノンの奉獻式が行われた一〇七〇年頃
には、ドウナンは帝国側、すなわちエノー伯領側にあつた
ことになる。MGH, DD, H.IV.1, p.275; E. Delcambre,

¹ 'Ostrevant du IX^e au XIII^e siècle', *Le Moyen Age*,
28, 1927, pp.256-257. アスブルについてもはっきりと
た史料は残っていないが、ドウナンよりさらに南方であ
るため、エノーに属すると考えるのが妥当だろう。

(32) 現ベルギー、ワロン地方の都市。

(33) Dhondt, *op. cit.*, p.61,70.

(34) D. Nicholas, *op. cit.*, p.51.

(35) たとえばノルマンディー公家では、ロロが聖アウドエ
ヌスの聖遺物を獲得してルーアンに献納している。この
聖遺物のために、のちにリシャル一世が装飾を施した
聖遺物容器を用意した。G. Philippe, 'Les reliques des
saints : Publications récentes et perspectives nouvelles
(III)', *Revue belge de philologie et d'histoire*, 85, 2007,
pp.589-880. またリシャル一世は、みずからが創建し
たトリニテ・ズ・フェカン修道院にも多くの聖遺物を献
納した。L. Musset, 'Les translations de reliques en
Normandie (IX^e-XII^e siècles)', dans *Les Saints dans la
Normandie médiévale : colloque de Cerisy-la-Salle*,
26-29 septembre 1996, sous la direction de P. Bouet et
F. Neveux, Caen, 2000, pp.97-108. キョーム・ル・バタ
ールは、一〇六〇年頃に自らのイニシアティブで創建が
開始されたカンのサンティエンヌ修道院とサントット
リニテ修道院のために数多くの聖遺物を収集した。
Ibid. pp.97-108; *Gallia christiana in provincias ecclesi-
asticas : distributa in qua series et historia archiepiscoporum,
episcoporum et abbatum regionum omnium quas*

vetus gallia complectebatur, ab origine ecclesiarum ad nostra tempora deductur, & probatur ex authenticis instrumentis ad calcem appositis, tom. XI, Paris, 1759, cols.420-429. アンジュー伯家では「ジョフロワ・グリスゴネルがマリアの腰帯をノートルダム・ド・ロッシユ律修参事会教会に献納したと伝えられる。フルク・ネッラはイエルサレムから聖墳墓の一部を持ち帰り、サン＝セビュルクル・ド・ボーリユー修道院を建立している。

またフルク・ネッラはアンボワーズのノートルダム教会にも、真の十字架の一部と聖フロレンティヌスの聖遺物を献納している。 *Chroniques des comtes d'Anjou et des seigneurs d'Amboise*, eds. L. Halphen et R. Poupardin, Paris, 1913, p.44, 51, pp.143-44. フルク・ル・ジュールは一二八年の聖アルビヌスの聖遺物移送に関与してゐる。 *Cartulaire de l'abbaye de Saint-Aubin d'Angers*, pub. par le comte Bertrand de Broussillon, tom.II, Paris, 1903, pp.48-49.

- (36) アンジュー伯家のフルク・ネッラは、当時プロワ伯家とその支配権を争っていたトゥーレーヌに前述のサン＝セビュルクル・ド・ボーリユー修道院を建立し、これを自らの墓所とした。 *Chroniques des comtes d'Anjou*, p. 54, pp.234-235; L. Halphen, *Le comté d'Anjou au XIe siècle*, Paris, 1906, pp.234-236. またジョフロワ・ル・ネルは、父フルク・ル・ジュールが妻の相続権を通じて獲得したメーヌのサン＝ジュリアン・デュ・マン教会(ル・マンのカテドラル)を自身の墓所としている。

Chroniques des comtes d'Anjou, p.72,174, 224, 244. ノルマンディー公家のアンリ・ボークレルは「父が獲得したイングラントにレディング修道院を建立し」ここに葬られてゐる。 *Ordeicus Vitalis, The Ecclesiastic History of England and Normandy*, vol.IV, p.81, pp.148-151; *The gesta Normannorum ducum of William of Jumièges, Orderic Vitalis and Robert of Torigni*, ed. E. M.C.von Houts, 2vols, Oxford,1992, v.2, pp.252-253. また、本論で取り上げたノートルダム・ド・リール教会と

アスノン修道院も、フランドル伯家が新たに勢力を伸ばしたフランドル南方に建てられているが、これらもそれぞれ、建立・再建者たるボーラン・ド・リールとボーラン・ド・キンスの墓所となっている。 *Lamberti Genealogia comitum Flandriae*, MGH, SS, tom.9, p.309; *Flandria Generosa*, p.319, 321; *Statistique archéologique du Département du Nord*, 2de partie, Lille/Paris, 1867, pp.425-6.

- (37) アンジュー伯家のジョフロワ・ル・ベルが葬られたサン＝ジュリアン・デュ・マン教会には「ジョフロワを象った壮麗な七宝焼きの肖像が掲げられ、そこには彼の武勇や徳を称える墓碑銘が刻まれている」。 R. Favreau, 'L'épithaphe d'Henri II Plantagenêt à Fontevraud', *Caheirs de civilisation médiévale*, 197, janvier-mars, 2007, pp.3-10. 次の文献に装飾画の詳細な描写がある。 C. Port, *Dictionnaire historique: géographique et biographique de Maine-et-Loire*, Paris, 1876, p.255. ルーアンの

司教座聖堂にはノルマンディー公家のロロとギョーム・ロンゲベが葬られているが、彼らの墓にも長い墓碑銘が書かれ、両者の武勇と徳を称えている。これらの墓碑銘は現存していないが、オルデリック・ヴィタルが書き残している⁽³⁸⁾。Ordericus Vitalis, *Orderici Vitalis Angligenae, Coenobii Ulricensis Monachi, Historie Ecclesiasticae Libri Tredecem*, sous la direction de A. Le

(38) Prévost, tom.II, Paris, 1840, pp.372-373.

『ジオルジュ・デュビイ、ロベール・マンドルー』フランス文化史1『前川貞次郎他訳、人文書院、一九六九年、一三九～一四七頁・アニータ・ゲロ||ジャラベール「宮廷風文化」『中世フランスの文化』M・ソ、J||P・ブデ、A・ゲロ||ジャラベール編著、桐村泰次訳、論創社、二〇一六年、二七八～三四四頁。